



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4104 号 2017.12.27 発行

駅の放送翻訳アプリ 由布院駅で J R九州実証実験 読売新聞 2017 年 12 月 27 日  
遅延情報などを知らせる「おもてなしガイド」のトップ画面



J R九州は 26 日、駅で放送される列車の遅延情報などを外国語に翻訳するスマートフォン向けアプリの実証実験を、由布市の由布院駅で始めた。増加する訪日外国人へのサービス向上の一環で、利用者の声を踏まえて実用化を検討する。(坂口尊洸)

アプリは大手楽器メーカーのヤマハ(浜松市)が 2014 年に開発した「おもてなしガイド」。スマホやタブレット端末で事前にアプリを無料でダウンロードすると、列車の遅延や運休などが生じた際、駅構内で流れる日本語放送を英語、中国語、韓国語の 3 か国語に翻訳した文章が画面に表示される。日本語表記も可能で、聴覚障害者にも役立つという。

J R九州によると、在来線や九州新幹線が乗り放題になる外国人向け専用パス「九州レールパス」の 16 年度の販売枚数は約 23 万枚。5 年前の 11 年度の約 5 万 2000 枚を大きく上回るなど、九州を訪れる外国人は増加傾向にある。

由布院温泉目当ての中国人や韓国人が利用する由布院駅では、遅延や運休の際に駅員が中国語や韓国語で貼り紙を掲示したり、ウェブサイトの翻訳機能を使って個別に対応したりしていたが、対応に時間がかかることもあったという。

同社は「19 年のラグビー・ワールドカップ日本大会や、20 年の東京五輪・パラリンピックで訪日外国人がさらに増加することが予想される。実証実験の結果を基に主要駅への導入を検討したい」としている。

県、子ども基金を全国初創設 来年度、虐待や待機児童など対策

中日新聞 2017 年 12 月 27 日 三重

県は二十六日、二〇一八年度から子どもの貧困や虐待、待機児童などの対策に充てる「子ども基金」を新設すると発表した。財源として法人県民税の一部にあたる年一億二千万円程度を確保する見込み。県によると、こうした基金創設は全国で初めて。

基金に充てるのは、法人県民税のうち「超過課税」と呼ばれる部分で、県が独自政策を実現するために標準税率に上乗せして企業などに課している。全体は約十億円で、うち 12% を施策事業費として活用する。基金創設で、毎年一定額を確実に子ども政策に活用することが期待できる。里親制度の充実、男性の育児参加や不妊治療の支援などの使途を検討する。

鈴木英敬知事は定例会見で、高齢者向けの介護保険などと比較すると、子どものための政策に毎年安定して使える財源を国が確保していないと指摘。「国でできないのなら地方で先にやる」と強調した。自民党の小泉進次郎衆院議員らが子ども向け安定財源として「子ども保険」導入を提唱したが、実現の見通しが立っていない経緯もある。

県はこれまでも超過課税分の35%を「福祉基金」として子どもや高齢者、障害者対策に使ってきた。

今回はこの福祉基金を減らして子ども基金に回した部分が大半で、実際に子ども向けに増える財源は数千万円程度。県幹部は「金額に大きな変化はないが、企業も含め社会全体で子どもを応援する姿勢を明確にできることが重要」と説明する。（森耕一）

## 難病の子、家族ら写真集 「命に出会えたことの奇跡を伝えたい」



東京新聞 2017年12月27日

18トリソミーの長女、岸本心咲ちゃん（中）と父親の太一さん（左）、母親の美玲さん＝東京都葛飾区で（川上智世撮影）

重い心臓、呼吸器疾患を伴うことの多い染色体異常症「18トリソミー」の子の親たちでつくるグループが、ネットで支援者を募り、写真集を出版する。18トリソミーは流産や死産が多く、生まれても短命とされるが、近年は自宅で医療的ケアを受けながら成長する子が増えてきた。グループは写真集に「命に出会えたことの奇跡を伝えたい」との思いを込める。（奥野斐）

野斐）

企画したのは、東京都葛飾区の岸本太一さん（33）が代表を務める「Team18」。会員制交流サイト（SNS）で情報交換しながら、二〇〇八年から首都圏を中心に三十カ所以上で写真展を開催した。活動十年の節目に「18トリソミーの子や家族の現状、思いを広く発信したい」と、写真集を計画。二百九十六人の子とその家族が参加する。

「新型出生前診断の対象になり、18トリソミーについて聞く機会が増えた一方で、重篤や不幸というイメージを持たれる。幸せな家族の生活もあると知ってほしかった」と岸本さん。写真集には亡くなった子を含め、家族ごとに写真と紹介文を載せる。

長女心咲（みさき）ちゃん（6つ）が18トリソミーと知ったのは、妻美玲さん（39）が妊娠三十六週の時。医師には「亡くなるのを待ちましょう」と告げられた。特別支援学校の教諭として、障害児の成長を見てきた岸本さんは「産むことに迷いはなかった」が、医師の言葉はショックが大きかったという。

心臓疾患などの合併症があり、生後八カ月まで入院し、三度の手術も経験。今は胃ろうで水分や栄養を取り、夜間に人工呼吸器を使うが、体調は安定している。週二回、保育所にも通い、来春から特別支援学校に入学予定だ。

美玲さんは「ゆっくりだけど、日々成長している。産む前には想像できなかった、いいことがたくさんあった」。双子を含めた三人の妹たちに囲まれた心咲ちゃんを見て、目を細めた。

ネット上で資金を募るクラウドファンディング（CF）による支援の募集は来年一月三十一日まで。写真集が付く五千円コースなどがある。詳細はCFサイト「Ready for」で「18トリソミー」と検索。「Team18」のホームページでも案内している。

＜18トリソミー＞ 18番染色体が通常より1本多く3本あるために、先天性心疾患や消化器系合併症などを伴う。1歳までの生存率は数年前まで1割前後とされたが、最近の研究では29%との数字もある。出生頻度は3500～8500人に1人とされ、女兒が多い。

## 周防大島の15歳自殺 大島商船高専いじめ問題 第三者委が初会合 教員の威圧的調査も検証へ /山口

毎日新聞 2017年12月26日

大島商船高専（周防大島町）の2年の男子学生（17）が別の学生の自殺をきっかけに

同級生からいじめを受けたと訴えている問題で25日、新たに設置された第三者委員会の初会合が校内であった。いじめによる適応障害の状態と診断された男子学生に対し、学内の「いじめ対策委員会」の教員が威圧的な聞き取り調査をした疑いもあり、第三者委は教員の調査に問題がなかったかも検証する。

第三者委は大学教授や弁護士、臨床心理士の3人で構成。所属や氏名は非公表としている

## シンポジウム 悩める大学生に支援を 実践や課題発表 名大 / 愛知 毎日新聞 2017年12月26日

シンポジウムで意見を交わす専門家たち＝名古屋市千種区の名古屋大東山キャンパスで

抑うつで不登校になるなど、学生生活に困難を抱える大学生の支援を考えるシンポジウム「苦戦する青年を育てる地域づくり」が25日、名古屋大東山キャンパスであった。大学、行政、企業の関係者や若者支援のボランティアなど約180人が参加した。

主催した「名古屋大学生相談総合センター」には昨年度、約1500件の相談が寄せられ、開設した2001年度の約2・5倍に増えた。シンポジウムでは「メンタルヘルス」「学生相談」「就職相談」「障害学生支援」の4部門の担当者が、これまでの実践や課題を発表した。



## アジアユース パラ競技大会 喜びの金報告 走り幅跳び・小久保選手

東京新聞 2017年12月27日

優勝報告会で金メダルを胸にガッツポーズする小久保寛太選手＝本庄市役所で（同市提供）



県立本庄特別支援学校高等部3年の小久保寛太選手（18）が、今月開催された「ドバイ2017 アジアユースパラ競技大会」の男子走り幅跳びで金メダルを獲得し、本庄市役所で優勝報告会が開かれた。（花井勝規）

小久保選手は知的障害のクラス「T20」に出場。初めての国際大会出場だったものの、自己ベストを上回る六メートル五十三センチを跳び、優勝した。

小久保選手は「自己新記録で金メダルが取れました。目標は東京パラリンピックに出ることとメダルを取ることです。目標に向かってこれからも頑張ります」と笑顔で抱負を語り、約百五十人の出席者から大きな拍手が送られた。

小久保選手は深谷市生まれ。走ることが大好きだったため同市内の中学で陸上競技の短距離を始め、本庄特別支援学校高等部入学後も続けてきた。

今年の五月、小久保選手を指導する樋口進太郎教諭（36）の勧めで走り幅跳びに転向。持ち前の脚力を生かし、次々に自己記録を更新してきた。

樋口教諭は「まだ世界記録には一メートルほど足りないが、伸び盛りなので東京パラリンピックでも期待が持てる」と話している。

## 箕面虐待死 暴行1カ月、あざ50カ所 防犯カメラに映像

毎日新聞 2017年12月26日

大阪府箕面市の筒井歩夢（あゆむ）ちゃん（4）が自宅で虐待を受けた末、殺害された

とされる事件で、歩夢ちゃんの全身にあったあざは約50カ所に上ることが26日、捜査関係者への取材で分かった。殺人容疑で逮捕された母親の麻衣容疑者（26）と交際相手の男らの計3人は11月中旬ごろから同居を始めたとされ、府警は、歩夢ちゃんが約1カ月間、ほぼ連日暴行を受けていたとみている。

捜査関係者によると、暴行によるとみられるあざは全身に広がっていて時間が経過したものや新しいものが交じっていた。特に顔と腹部が激しく、死因は腹腔内（ふくくうない）出血だった。



送検のため箕面署を出る松本匠吾容疑者＝大阪府箕面市で2017年12月26日午後0時2分、貝塚太一撮影

麻衣容疑者は「以前殴ったことはあるが、今回は暴力を振るっていない」と逮捕容疑を否認している。日常的な暴行について「言うことをきかないのでしつけとして殴った」と供述。同居する交際相手の松本匠吾（24）と、大倉敏弥（20）の両容疑者が主に暴行していたとしている。両容疑者は「麻衣容疑者から『しつけのためだからたたいて』と頼まれ、何度も暴行した」と説明。逮捕容疑を認め、「死んでしまうかもしれないと思った」などと話しているという。府警は虐待が始まった経緯などを調べる。

また、死亡前日の24日には、自宅のある集合住宅のエレベーター内で松本容疑者らに歩夢ちゃんが暴行される様子が防犯カメラに映っていた。同居する次男（2）にも複数のあざが確認されている。

歩夢ちゃんと次男は今年5月から箕面市内の保育所に通っていたが、松本容疑者らが同居を始めた数日後とみられる11月17日以降、保育所をほとんど休んでいた。府警は、5人での生活が始まった直後から兄弟への暴行が始まったとみており、麻衣容疑者らが発覚を恐れて保育所に通わせなかった可能性もあるとみて調べる。

府警は26日、3容疑者を殺人容疑で送検した。【山田毅、村田拓也、芝村侑美】

#### 津久井やまゆり園を月命日に訪問 「忘れてはいけない」 東京新聞 2017年12月27日



太田さん（左）の説明を聞くメンバーら＝相模原市緑区で  
昨年七月に相模原市緑区の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で十九人が犠牲になった殺傷事件を振り返り共生社会について考えようと、東京都内の大学生と高校生ら十七人が二十六日、同施設を訪れた。

参加したのは、八王子市を拠点に改憲や人権問題を考える十～二十代のグループ「わかはち」のメンバー。事件発生から一年五カ月を機に、「忘れてはいけない」と企画した。

月命日のこの日、元職員や住民らでつくる「共に生きる社会を考える会」の十人に迎えられ、献花台に花束を供え、黙とう。その後、近くの公民館で事件について話し合った。

高校二年の倉田優花さん（17）は「根強く残る差別意識とどう向き合ったらいいのか」と質問。元職員の太田顕さん（74）は「施設ができてすぐは利用者とするけ違うと電柱に隠れてしまう小学生もいたが、祭りや運動会といった交流を通じ徐々に変わっていった。日常的に接することで違和感は解消できる」と話した。

「実名や人柄が報道されていない犠牲者もおり、その人を思って手を合わせる事ができない」との声が上がると、太田さんは「囲碁が好きでいつも番組を正座して見ていた」「しっかり者で職員の手伝いをしてくれた」などと犠牲者の人柄を紹介した。（加藤豊大）

## <仙台国際ホテル暴行>ホテル側謝罪し和解

河北新報 2017年12月27日

仙台市青葉区の仙台国際ホテルの女性元従業員（21）＝宮城野区＝が、ホテル洋食部門の元料理長の40代男性から暴行を受けた問題で、ホテル側が解決を求めた民事調停は26日、ホテル側が暴行を謝罪することなどで、仙台簡裁で和解が成立した。

女性側代理人やホテルによると、和解内容は（1）1月2日に元料理長が女性を突き飛ばしたことを謝罪する（2）元料理長と調理師ら2人の言動で女性が精神的苦痛を被ったと主張したことを真摯（しんし）に受け止め、謝罪する（3）障害者への人権侵害事案の再発防止を図る－など。

問題を巡り、女性側は1月2日にホテルの調理場で元料理長から蹴られた上、昨年7～12月には調理師ら2人から暴行を受けたなどとも主張。ホテル側は他に暴行や暴言は確認できなかったとし、今年10月4日に調停を申し立てた。

和解成立後、女性は「二度と同じことを繰り返さないでほしい」と語り、ホテルの社長は「今後パワハラのない会社にするよう最大限努力する」と話した。

元料理長は今月11日、女性を膝で突き飛ばした暴行容疑で宮城県警に書類送検された。女性は生まれつき両脚にまひがあり、障害等級は4級。昨年4月に正社員で採用された。今月26日付で退職した。

## 未払い賃金 国が支払いへ

読売新聞 2017年12月27日

◇福山の事業所解雇 障害者らに一部

福山市曙町の一般社団法人「しあわせの庭」が、経営破綻を理由に、運営する事業所で働いていた障害者を一斉解雇した問題で、湯崎知事は26日、来年1月中にも国から未払い賃金の一部が支払われる見通しであることを明らかにした。

企業倒産などの場合に適用される国の未払い賃金立て替え払い制度により、未払い賃金の8割を上限に、障害者や職員に対して支払われることになる。湯崎知事は「早い対応で、利用者や職員も安心できると思う」と述べた。

法人は破産手続き中で、残りの未払い賃金などについては「支払うことができるかどうかも含め、管財人と話をしたい」とした。

## 見えない虐待 親が子どもに過剰な期待

NHK ニュース 2017年12月26日

ことし9月に出版された一冊の本があります。タイトルは「父の逸脱」。フランスの教育熱心な家庭で、親が子どもに過剰な期待を寄せたことで、虐待へと発展していった様子を描いたものです。5年前にフランスで出版されて以来、増版を重ね10万部以上売れて、大きな反響を呼んできました。著名な作家や政治家ではない

1人の市民が書いた本が、なぜそれほど多くの人を引きつけてきたのでしょうか。（国際部記者 古山彰子）（邦訳：「父の逸脱 ピアノレッスンという拷問」セリーヌ・ラファエル著、林昌宏訳、新泉社2017）

### ある女性の告発

本の著者は、フランス中部の裕福な家庭に生まれたセリーヌ・ラファエルさん（33）。2歳半の時に始めたピアノでたぐいまれな才能を持っていることがわかり、父親は「一流のピアニストに育てる」と決意しました。

しかし、過剰な期待を掛けた父親は娘に過酷なピアノのレッスンを強いるようになり、次第に暴力を伴う虐待を繰り返すようになります。本はセリーヌさんが受けた過酷な虐待の



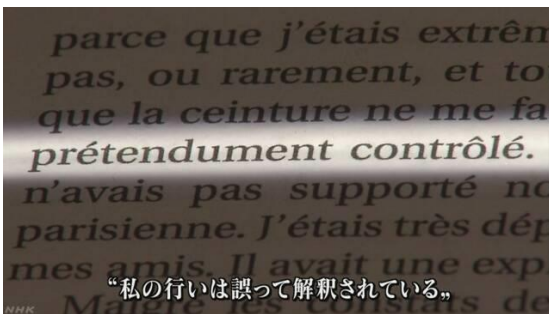


実態と施設に保護されるまでの過程を、克明に描いたものでした。

「父は私をベルトでむち打つようになり、さらに私がピアノで間違えると、私の肩、腕、太ももを硬いスリッパで殴った。私はピアノのある部屋に閉じ込められ、練習に集中していないと父が判断すると、トイレにさえ行かせてもらえなかった」「父はオルゴールをわしづかみにすると、思い切り床にたたきつけた。オルゴール

の箱はピエロもろとも砕け散った。それはまるで私自身のようだった」

4歳で1日4時間、10歳で1日7時間、父親からピアノの練習を強要されたセリーヌさん。間違えるとベルトやスリッパでたたかれ、練習が足りないという理由から食事をとらせてもらえない日も続きました。そして14歳のときエスカレートする父親の虐待に耐えかね、学校の校医の助けを得て警察に通報し、保護されます。



その後、裁判で父親の行為は虐待と認定されましたが、法廷で父親が口にしたのは、思いもよらない言葉だったといいます。

「確かに私はセリーヌをたたきました。なぜなら、娘は思春期（難しい年頃）で、反抗期だったからです。しかし私はいつも十分に手加減していました。私の行いは誤って解釈されている」

父親は、自分の行為があくまでも娘のためを

思っただけの指導であり、虐待とは考えていなかったと、最後まで正当化し続けたといいます。ことし9月の出版に先立ち、日本語版をお借りして一気に読み終えた私は、強い衝撃を受けました。

私が地方局にいたころ取材していた「育児を放棄する親」や「貧困ゆえに子どもを虐げる親」とは全く違う、「教育熱心で子どもに期待を抱く親」が引き起こす「見えない虐待」。この問題の真相に迫ろうと、フランスにセリーヌさんを訪ねることになりました。



### セリーヌさんの素顔

33歳になったセリーヌさんは、パリのアパートで夫と2人で暮らしていました。いまは父親が切望した「一流のピアニスト」でなく、医師として働いています。

幼いころ、がんに苦しみながら亡くなった知人の姿を見てから、「人を救う医師」になることが本当の夢だったといいます。小柄で今にも折れてしまいそうなほどきゃしゃな体で、

少女のようなあどけない笑顔を浮かべるセリーヌさん。

そんな彼女がさらに小さかったころ、いちばん安心できるはずの家庭で父親から繰り返し暴力を受けていたなんて、想像しただけで胸が痛みました。当時のつらい思い出を振り返りながら、セリーヌさんはゆっくりと話し始めました。

「小さいころはピアノが大嫌いでした。私にとってすべての悪の原因だったのです。次の

瞬間に何が起きるのだろうと、いつもびくびくしていました。我慢して、我慢して、時間がたてばたつほど私は死にたくなりました。ピアノの先生が私に才能があると言ったときから、父は私を完璧にしなくてははいけないと思い込んだのです。彼にとって、それは使命になりました。でもそれは、誤った愛の表現だったのです」

パリの病院で痛み治療の専門医として働いているセリーヌさんは、患者の中に虐待が原因で生涯慢性的な痛みを苦しむ人も多いといいます。

そして「自分ならその苦しみがわかる」と、虐待を受けた患者とも向き合い治療にあたっています。

さらに、本業の傍らで、親の世代にも子どもとの接し方を見直してもらいたいと、各地で講演も続けています。診察と講演の予定で埋め尽くされたスケジュール表を見せてくれました。

私がフランスを訪れていた11月下旬にも、南西部のランド県の招きで、市民やソーシャルワーカーを前に講演しました。

「私が裕福な家庭の子どもだったから、なかなか虐待に気付いてもらえず、見過ごされたのです。最も大事なメッセージは、虐待はどんな家庭にも起きうることなのです」

#### 光があてられる「見えない虐待」

セリーヌさんの本をきっかけに、フランスでは親の子どもへの過剰な期待が「見えない虐待」につながっているのではないかと、注目されるようになってきました。長年、虐待を受けた子どもやその親の治療にあたってきた専門家も、親の過剰な期待から生まれる虐待は発見しづらく対策が難しいと、指摘しています。

「子どもたちの多くはとてもよい衣服を身につけているので、虐待の痕跡は目にみえません。学校にも通い、よいものも食べています。貧しい家庭で見られるような虐待のサインは、こうした子どもには見えないのです」

私が取材した南西部のランド県にある、虐待を受けた子どもたちが保護されている施設では、10か月ほど前から保護されている15歳の少年から話を聞くことができました。

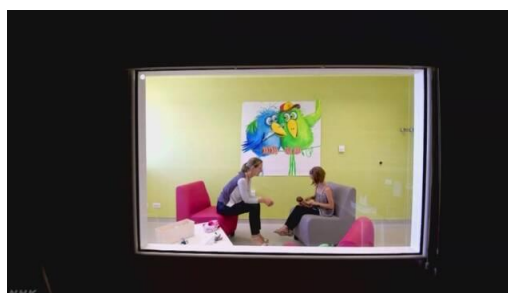
少年は「将来立派な大人になってほしい、だから学校では成績優秀であってほしい」という父親の期待に応えられず、繰り返し暴力を受けたといいます。

「僕が悪い点数を隠していたから、父が怒ったんです。たたかれることもありました。僕がきちんと自覚して、成功するようになって。勉強しようとして頑張ったけれど、頭に入る時もあるし入らない時もありました。とても悲しかったです。僕が望んでこの施設に入りましたが、ここにいることもつらいです」



少年の家庭は決して貧しくなく、周りの大人は虐待に気付くことはなかったといえます。少年は言葉数は少ないものの、私の質問に、静かに丁寧に、言葉を絞り出すように答えてくれました。

テストでいつも100点を取れるとは限らない。得意な科目もあれば、そうでない科目もある。期待に応えようと努力しても、思うような結果が出せないこともある。そんなときいちばん身近な親にののしられ暴力を振るわれたら、子どもはどう感じるのか。ひと言ひと言が胸に突き刺さりました。



「見えない虐待」を防ぐため、フランス政府も動きだしました。去年（2016年）12月、医師や心理学者などをつくる委員会を設置。家庭内に埋もれた虐待の実態を把握しようと、議論が始まっています。

子どものわずかな言動から、虐待の実態を見抜き救済につなげていこうという、取り組みも始まっています。

全国56か所の病院には特別な部屋が設けられ、警察官が子どもから話を聞くと同時に、マジックミラー越しに医師や心理学者も待機して、子どもが勇気を振り絞って発する一言一句から、わずかなサインも読み取り、虐待の実態を把握しようとしています。

対策委員会のクレオフ副委員長からは、これまでの対策の不備を認め、子どもの救済を目指したいという、率直な言葉も聞かれました。

「フランスはこれまで児童虐待の真の姿を無視してきました。子どもを虐待の危険にさらしたままの社会では、文明国とはいえません。家庭が神聖不可侵なものだと強調されるあまり、虐待の事実が見過ごされてきました。子どもたちを救済するため、国で統一した対策を作り、全国で対応できるチームをつくろうとしています」

### 日本にも潜む「見えない虐待」

取材を終え帰国した私は、子どもたちがピアノや学習塾など多くの習い事を掛け持ちする日本でも、「見えない虐待」の危険が潜んでいると、強く感じるようになりました。

実際、セリーヌさんの本の日本語訳はことし9月に出版されたあと増版を重ね、親世代を中心に子どもとの向き合い方を見直したいという感想が、数多く寄せられています。

「自分自身をそういう目で振り返り、反省しています」「自分が悪いことをしているなんて、思っていなかった」

一方で、虐待を受けた側の声も聞かれました。今月20日のNHKの放送でセリーヌさんの体験を紹介すると、長い間連絡を取っていなかったある友人から私のもとにメッセージが届きました。

「これ、まんま私です。ニュースにしてくれてありがとうございます。同じ思いをしている人が周りにもたくさんいます。SOSが出しやすくなるためにも、もっともっと親である人、これから親になる人、周りの人にも知ってほしい」

30年にわたって虐待の被害者のカウンセリングを行ってきた立命館大学の村本邦子教授は、少子化が進む日本でも、程度の差こそあれ、親の期待が子どもへの虐待につながる危険が常に存在していると、警鐘を鳴らしています。

「子どもが1人や2人だと親の期待が集中して、手間暇かけてそれだけ投資しているんだから





から、それだけのものを返してほしいという思いは大きくなる。こうでなければならないというかたくなな考えが強すぎると、それに力づくではめ込もうとして、虐待というかたちになってしまう」

### セリーヌさんの言葉

「見えない虐待」の取材をするきっかけをくれたセリーヌさん。いまは心を許せる夫と出会い、ピアノとも再び向き合えるようになったといいます。最後に私たちのために、ショパンの「ノクターン」やドビュッシーの「アラベスク」を弾いてくれました。



「久しぶりだから思うように弾けないわ」とはにかんでいました。しかし、その音色はりと美しく、過去を乗り越え前へ前へと進もうとしてきた彼女の人生そのもののように感じました。

「子どもが必要としているのは愛情と安心です。子どもを成功に導くために、辱める必要もたたく必要もない。親はただ後ろからそっと支え、子どもが手足をかけよじ登れる木のような存在になるべきです」

たとえ愛していても、子どもに期待をかける親の目線から見えるものと、それを受け止める子どもが感じるものは同じではない。自分と同じ思いをする子どもを1人でも減らしたいと願うセリーヌさんの言葉は重く、心に深く残りました。

## 潜在看護師活用し新事業 超高齢社会支援へ 来月にも 健康相談など 24時間態勢で対応

長崎新聞 2017年12月26日

民間が主体となり県、大学などの支援で、看護師資格を持ちながら働いていない「潜在看護師」を活用し、高齢者からの健康相談などに24時間態勢で対応する事業が県内でスタートする。健康寿命を延ばすのに役立つ新産業の創出を支援する経済産業省の補助事業に10月採択され、来月にもサービスを始める方針。県内の高齢化率が3割を超える中、関係者は「(病院などの)公的保険外の対応を補うことで、超高齢社会を支えたい」としている。

事業では高齢者や家族などを会員として募り、会員側からの相談に看護師が電話で応じる。高齢者宅の血圧計などと看護師のスマートフォンをネットワークでつなぎ、離れた場所でも健康状態を確認できる仕組みを想定している。異常や要請があった場合は訪問して対応。看護師では対応困難な案件は、専門の看護師や医師に引き継ぐ。

病院にかかる前の段階で、高齢者の健康不安に対し柔軟に対応できることが特長。夜間の高齢者施設からの相談に応じるといったサービスも可能。潜在看護師は交代制で対応し、当面8人が働く予定。在宅で勤務可能で、潜在看護師の就労を促す狙いもある。

有識者や事業所、県でつくる「県の介護周辺・健康サービスを考える会」(委員長・立石憲彦県立大教授)が3年前から事業化を検討。企業や診療所、歯科医院など5事業所でつくる「平成の出島コンソーシアム」が運営し、県や同大などが支援する。

今後、会費などを決めた上で会員募集を始める方針。立石委員長は「ビジネス化することで、高齢者を持続的に支えていく体制を整えたい」とする。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

